

## 涼宮ハルヒの憂鬱：非日常性の規範的構造 (誌上シンポジウム『涼宮ハルヒの憂鬱』)

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2015-11-13<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 岡田, 安功<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00009218">https://doi.org/10.14945/00009218</a>                       |

# 『涼宮ハルヒの憂鬱』：非日常性の規範的構造

“The Melancholy of Haruhi Suzumiya” : The Normative Structure of Extraordinariness

岡田安功

Yasunori OKADA

静岡大学情報学部・教授

okada@inf.shizuoka.ac.jp

## はじめに

ライトノベルとして出版された『涼宮ハルヒの憂鬱』（角川書店、2003）の作品としての魅力を支えるのは物語の主役であるハルヒと物語の語り部であるキヨンの魅力である<sup>(1)</sup>。普通ではないハルヒの生き方を普通の生き方をするキヨンを通して体験できることが読者に安心感を与えていている。秩序を破るのはハルヒであるが、秩序を回復するのはキヨンである。読者の規範意識に近いキヨンが普通ではない様々な状況に巻き込まれながら、宇宙の危機を回避して物語が終わる基本的な構造が読者にカタルシスを与えていている。そこでは、ハルヒに起因する宇宙の危機を誘発するのはキヨンであり、この危機を解消するのもキヨンである。ハルヒとキヨンは一体となって物語を展開し、ハルヒは狂言回しであり、キヨンは共同の主役である。ハルヒもキヨンも秩序に対して両義的な役割を果たしている。このような構造が読者の心をつかんでいるように私には思える<sup>(2)</sup>。本稿はこの作品の魅力の原因を規範論の観点から作品の流れにそつて検証する。

## 普通は失う夢の理想像

ハルヒは既存の宇宙を破壊し、新しい宇宙を

創造する能力をもちながら、自分がその能力をもっていることを知らず、それどころか、小学校6年生の時、野球場で多くの観衆を見て自分が特別な人間であるという思いを碎かれている。だからこそ、ハルヒは非日常との邂逅を待ち望んで奇矯な行動をとり続けるのだが、物語においても、我々の日常においても（実際にこのような人物がいればの話だが）、このような人物は神のごとき特殊な人物なので、この作品では規範からの逸脱が許される人物として描かれている。人は全能感<sup>(3)</sup>を失って大人になるのだが、ハルヒは全能感を失いながらそれにしがみつき、しかも自分でも気づかない巨大な能力をもっていて、容姿も運動能力も抜群で、学校の成績も優秀である。このような人物像は現在の若い世代の見果てぬ夢であろう。キヨンの次の言葉はこの作品の支持者の声を代弁している。「ハルヒの生き様をうらやましいと思う理屈では割り切れない感情が心の片隅でひっそり踊っている」。だから、この作品は漫画やテレビアニメにまでなったのである。

## 性を超越する存在 1

ハルヒは誰が見ても美人の高校1年生である。いつも不機嫌そうなイライラした顔をして

口をへの字にしているが、ハルヒは性格が変人奇人で常軌を逸している点を除けば、顔もスタイルも男子生徒に不自由しないだけのものもっている。ところが、男子生徒の注目を集め容姿であるにもかかわらず、体育の時間を迎えると、ハルヒは教室に男子生徒がいても平気で着替えを始める。男子生徒は他のクラスに移動して着替えることになっているが、ハルヒは男の目を全く気にしない。このような場合、男子生徒が移動してから女子生徒が着替えを始めるのが普通であるが、クラス委員長（女性）とクラスの女子がそろってハルヒに説教したが通じないので、体育前の休み時間になるとチャイムと同時にダッシュで教室から撤退することを男子生徒は義務づけられてしまった。ここではハルヒの逸脱性が男子生徒の新たな義務という規範を生み出している。ハルヒの逸脱性は修正されることなく容認されて新たな規範の源になっている。

### 秩序の破壊を許される存在

ハルヒがキヨンに新しいクラブを作ると告げるのは英語の授業中である。この時、ハルヒは眠気で首をカクカクさせている前の席のキヨンの襟首をわしづかみにして引っ張り、キヨンの後頭部を机の角に激突させて起こしている。しかも、ハルヒは新しいクラブを作ればいいことに気づいて、興奮のあまり起立してキヨンに話しかけている。授業中の私語はどこの学校でもありうることだが、授業中に起立して私語をする学生を私は見たことがないし、高校にもいないであろう。また、襟首をわしづかみにして引っ張るようなことも、普通の生徒ならしない。ハルヒは一方的に部活についてキヨンと問答を開するが、ハルヒは授業中であることを意識せず、全クラスメイトは半口開けた顔になり、大学を出たばかりの女教師は今にも泣きそうになる。この場面で、教師からハルヒに対する注意がないのは、ハルヒが規範を超えた存在であることを作者が表現するためである。現実にはあ

り得ない状況をさもありなんと思わせる描写をすることによって、ハルヒの特殊な人間としての魅力を作者は引き出している。この場面で最も注目すべきは、授業の秩序を破ったのがハルヒで、教師に合図を送って授業を再開させたのがキヨンだという設定である。秩序の破壊者と回復者の分業をハルヒとキヨンが分担している。これと類似の関係はこの物語のクライマックスでも展開される。秩序の破壊者と回復者が別人だと勸善懲惡の物語になりそうだが、この作品はそうならない。その原因はハルヒとキヨンが異なる人格でありながら、ほぼ一体となって行動していることがある。別人だが一体という関係はキヨンがこの作品の語り部であるという仕掛けによってより重層的な効果を挙げている。

### 違法行為が違法にならない存在

ハルヒは部員が新入生たった1人になった休部寸前の文芸部の部室を占領して、文芸部のたった1人の部員長門有希とキヨンを強引に新しいクラブのメンバーにしてしまう。転校生の古泉一樹や1年上級の朝比奈みくるも、人数5人以上という同好会の新設要件を満たすため、ハルヒに部室へ無理矢理連れてこられる。高校におけるクラブの新設は憲法21条が認める結社の自由の行使になるが、結社の自由は結社を作る自由だけでなく結社に加わらない自由や結社としての活動をしない自由も保障するので、ハルヒの強引な部員集めは憲法21条違反になり、同時に憲法13条が保障する個人の尊厳やプライバシー権を侵害することになる。憲法上は同好会の新設に人数制限はないが、20歳未満で法律行為能力のない高校生を教育する高校には生徒の管理について教育目的上の裁量権があり<sup>(4)</sup>、公共の福祉に反しない人権の制約は可能である。したがって、人数5人以上という同好会の新設要件は憲法違反ではない。ただ、国連の「子どもの権利条約」13条1項が「子どもは、表現の自由についての権利を有する」

と定め、15条1項が「締約国は、結社の自由及び平和的な集会の自由についての子どもの権利を認める」と定めているので、高校に教育上の裁量権があるといつても、子どもだという理由で生徒の憲法上の人権を高校が制約することはできない。高校におけるクラブ活動の自治性は法的に保障されている。この場合、高校が最終的な管理権を有する文芸部の部室<sup>(5)</sup>をハルヒが勝手に目的外使用を開始した点において校則違反の可能性があり、またクラブへの強制加入も条理上の校則違反になると思われる。クラブに入ることを民法から見ると、入会希望者の入会の申込みという意思表示とこれに対するクラブの承諾という意思表示が合致したことを意味する。20歳未満の高校生の場合、親権者が高校生の法律行為を取り消すことができるが、親権者が取消さなければ高校生が結んだクラブに入る契約は有効である。ただし、契約は自由な意思に基づいて行われる必要があり、強迫による意思表示は民法96条1項によって取り消すことができる。ハルヒの上記の勧誘行為は民法上の強迫に該当する。ハルヒが新しいクラブを作るために実施した手法は違法になるが、これらについて高校の管理権を侵害したという旨の説明は作品中にはない。ハルヒは規範からの逸脱が許される存在として描かれている。しかし、これだけならハルヒが普通ではないという程度の物語にしかならない。表面上は強制的に仲間にされたメンバーがキョンを除き実はハルヒを監視するために近寄ってきた、ということが物語の進行の中で明らかになる。つまり、文芸部の部室の横取りも部員の強制加入も見かけだけだったということが、宇宙人の作ったヒューマノイド・インターフェイスである長門有希、未来人の朝比奈みくる、超能力者の古泉一樹、それぞれから章を分けてキョンへのハルヒに関する情報提供によって明らかになる。はたして、ハルヒは違法行為をしたのだろうか。ハルヒの勧誘行為が外觀において強迫であったことは確かであり、ハルヒに倫理的な逸脱行為があった

ことも確かだが、ハルヒの勧誘行為を違法にすると上記の入部者たちは困ってしまう。強制された振りをした意思表示を取消すことができる行為や無効な行為にする規定は民法に存在しない。作者はハルヒを違法にならない程度に社会規範から逸脱した人間として描きたいのであろう。

## 性を超越する存在 2

朝比奈みくるに対するハルヒの態度は基本的にセクハラである。小柄のロリ顔で巨乳という萌系のロリっぽいキャラを「めちゃめちゃ可愛い」と感じて、ハルヒは朝比奈みくるを部室に拉致してきた。部室に連れてきて早々、ハルヒは長門やキョンの前で朝比奈に後ろから抱きついて胸をわしづかみにしてじかに揉み始め、調子に乗って朝比奈のスカートを捲り上げかけたあたりで、キョンに朝比奈から引きはがされている。この間、朝比奈は悲鳴を上げて助けを求めている。キョンから「アホかお前は」といわれたハルヒの返事が「あんたも触ってみる？」である。キョンが心の中で「痴漢女」と思ったハルヒの行為は刑法176条の強制わいせつに該当するが、性犯罪は親告罪なので朝比奈が告訴しない限り捜査機関は捜査を開始しないし、おそらくこの程度の行為では起訴もないだろう。しかも、このような行為の後、朝比奈はハルヒの命じるままに書道部をやめてハルヒのクラブに入ることを承諾している。ここでもハルヒの行為には違法性が発生せず倫理的な社会規範を逸脱したという事実だけが残る。注目すべきは朝比奈に抱きついて胸をつかむときのハルヒについて性的快感が描写されておらず、朝比奈の性的魅力についてハルヒが平然とキョンに報告していることである。これはハルヒに性の意識が未成熟という次元の話ではない。男子生徒の前で平気で服を脱ぎ始めるハルヒに続き、ここでも性の規範を超越した存在としてのハルヒが描かれている。

## 犯罪と性を超越する存在

ハルヒは新しいクラブにSOS団という名前をつけた後、団のウェブサイトを立ち上げるために、コンピュータ研究部からパソコンを略奪する。ハルヒは朝比奈へのセクハラを利用してコンピュータ研究部長を強迫する。ハルヒは部長の手首を握りしめて部長の掌を朝倉の胸に押し付けて、この瞬間をキヨンにカメラで撮影させた。ハルヒは逃げようとする朝比奈を押さえつけて部長の手で朝比奈の胸をぐりぐりとまさぐり、これも撮影させた。部長は朝比奈のスカートに手を突っ込まれる寸前にまでなる。ハルヒはこの写真を学校中にはらまくと強迫して、最新のパソコン一式を強奪する。ここではセクハラに加えて、ハルヒは刑法249条の恐喝罪を実行している。このような写真を学校中にはらまくと、部長の手首を握っているハルヒも同罪になるはずだが、作品はこの点を不問にしている。しかも、ハルヒには悪意が全くない。この場面のセクハラと恐喝から、ハルヒが社会の常識的な性道徳を理解していることが伺える。ハルヒは性に対して無頓着なのではない。ハルヒは女性だが女性を超えた存在として描かれている。

## 社会を超越する存在

ハルヒは団員の勧誘にあたり奇抜な方法を思いつく。ここでまたセクハラが始まる。SOS団に生徒たちを勧誘するために、ハルヒは朝比奈みくるのセーラー服を脱がせて、悲鳴を上げる朝比奈にバニーガールの衣装を無理矢理着させ自分自身もバニーガールになって、いやがる朝比奈を校門へ連れて行き、勧誘活動をする。この勧誘活動はビラを半分しかまかないうちに、教師にやめさせられ、ハルヒは生活指導室に連行される。さて、部室に戻ってきたハルヒの第一声は「腹立つーっ！なんの、あのバカ教師ども、邪魔なのよ、邪魔っ！」である。ハルヒが全能感を捨てきれないただの子供ならこんな発言はできないであろう。ハルヒが社会秩序を実感できないぐれた生徒なら「なんの」

とはいわないだろう。ハルヒの自分本位はここでも一貫している。ハルヒにとっては自分自身の主觀が秩序であり法である。ハルヒの感覺は全能感を捨てきれない人間の自己中心主義とは似て非なるものである。国家が成立する前の自然状態で正義を主張するとハルヒのような生き方になる<sup>(6)</sup>。

## 宇宙を創造して破壊する神のごとき存在

この作品のクライマックスはハルヒとキヨンの「夢」である。睡眠中に、ハルヒは自分のイライラした無意識が作った閉鎖空間で目が覚め、キヨンはその隣りで伸びていた。そこは二人が通う高校だが、静寂と薄闇に支配された灰色の世界で、二人は元々存在した世界から完全に消えている。ハルヒがこの世界の拡大を望めば、元の世界は消滅する可能性がある。ハルヒが望めば、この世界が元の世界と同じような世界にもなる。やがて、中庭に青く光る巨人が現れて4階建ての校舎に拳を叩きつけて崩壊させる。この巨人はハルヒの心のわだかまりが限界に達すると出現し、巨人の破壊行為を通じてハルヒはストレスを発散させているが、ハルヒは気づかない。この場面について作品のエピローグで長門がキヨンに「あなたと涼宮ハルヒは二時間三十分、この世界から消えていた」といつているので、この出来事は作品上夢ではなく現実の出来事である。さて、ハルヒは世界の存在を左右できる創造主のような能力をもっている。無意識にせよ、ハルヒが創造した閉鎖空間はハルヒのものである。閉鎖空間にある校舎はハルヒが創造したものであり、この校舎を破壊する者がいれば、その者はハルヒに責任を負う。この閉鎖空間に元の世界の法律が適用できない場合でも<sup>(7)</sup>、基本的な法思考をすれば、誰の手も借りずに独立で創造した被造物には創造者の権利が発生すると誰もが考えるであろう。しかし、破壊行為をしている巨人はハルヒの化身である。自分で自分のものを破壊するだけなら法的責任が発生することは稀だが、この場合、キヨ

ンは身の危険を感じてハルヒを連れて逃げようとしている。破壊行為によってキヨンに危害が加わればハルヒの責任が問題になる。ところが、ハルヒは意図して巨人に破壊行為をさせている訳ではないし、巨人の破壊行為を回避させることができることがある訳でもない。したがって、仮にキヨンが巨人の破壊行為によって怪我をしたとしても、故意も過失もないハルヒには責任が発生しない。この場面でも、他の登場人物は右往左往するのだが、同様にハルヒには全く責任が発生しない。

### ハルヒの普通化と危機の解消

さて、ハルヒとキヨンは夢から覚めるように閉鎖空間から脱出する。閉鎖空間でハルヒは驚きのあまりか細い声で不安な態度を示す。この場面まで、ハルヒはキヨンに限らず相手の手を強引に引いて一方的に引きずりまわしていたが、ここでは校舎を歩いている間、ハルヒはキヨンのブレザーの裾を指でつまんで離さない。怖くてもキヨンの腕にすがりつくことを拒否するハルヒはもはや性を超越しない普通の少女である。巨人から本格的に逃げる場面以降はキヨンが一方的にハルヒの手を握りしめたままとなり、元の世界とは逆の現象が起こっている。キヨンとハルヒの関係が逆転することにより、キヨンは強引にハルヒと唇を合わせ二人は元の世界に戻っている。気がつけば、キヨンは自宅のベッドから床に落ちていた。ハルヒが普通の少女になり愛情で満たされたことが閉鎖空間を解消したことになる。閉鎖空間におけるハルヒの倫理は元の世界と対照的である。

ところで、閉鎖空間ができた原因は二つある。直接の原因は、ハルヒがキヨンと朝比奈の関係を誤解して怒りを感じたことである。この怒りは女性としての嫉妬である。この段階からキヨンとハルヒの関係が逆転し始める。遠因は、小学6年生の時、野球場で米粒のような観客の群衆を見て自分自身もその一つであることに衝撃を受け、自分自身を特別ではない普通の人間だ

と自覚して、「普通じゃなく面白い人生」を求めるようになったことである。この感覚は若い世代にかなり共有されているようだが、ハルヒは自分を普通の人間だと気づきながら、なぜ普通の生き方を肯定できないのだろうか。一人一人の人間は宇宙や歴史の中では気が遠くなるほど小さな存在だが、だからこそ尊いのではないだろうか。この感覚がハルヒにはない。

### おわりに

この作品はキヨンの語りで始まり、キヨンの語りで終わる。登場人物はすべてハルヒに振り回されるが、ハルヒは真相を知らない。物語はハルヒを中心に展開されるが、ハルヒは社会秩序から逸脱した行動をとるだけで、ハルヒを監視する登場人物が最も恐れる現象を引き起こす直接の原因を作ったのはキヨンであり、この現象を止めたのもキヨンである。作品の日常的な時空に非日常的な時空をもたらし、再び日常的な時空に戻すことによって、読者にカタルシスを与え日常的な時空を新たにする者が作品の主役だとすれば、この作品の主役は明らかにキヨンである。しかし、キヨンの活躍には狂言回しであるハルヒが不可欠である。この作品は異なるキャラクターのキヨンとハルヒが一体となって主役を演じ、キヨンの語りが二位一体を可能にしている。この二位一体によって、日常性を支える社会規範からの逸脱と社会規範への復帰を読者は経験できる。しかも、最後に読者は宇宙が消滅する危機の回避という、究極の非日常性も経験できる。注2で指摘したように、このような構造は名作と呼ばれる芸術作品ではありふれたものである。

本稿ではこの作品を規範論の観点から検討したが、最後にこの作品の意義を感想程度に述べておきたい。この作品は若い世代の感情をかなり反映しているが、作者はそれを全面的に肯定しているわけではない。この物語は、人間が普通であることに不満をもつと周囲の人間を不安にして振り回してしまい、この不安は宇宙の消

滅に対する不安に等しい不安を生み出すという寓話である。また、この物語はこの不満が性的な欲望を満足させることによって解消すると主張しているようである。閉鎖空間からの帰還後にキヨンがフロイトを思い出しながら自己分析しているのがその証拠である。ハルヒの規範からの逸脱の描写に性的規範からの逸脱が多いのもその証拠である<sup>(8)</sup>。

## 注

- (1) この作品に対する先行研究として、諸井克英「『涼宮ハルヒの憂鬱』が描く青年の妄想的世界 - 入門篇 -」同志社女子大学生活科学 45 卷 64-68 頁 (2011)、「総特集☆涼宮ハルヒのユリイカ！」ユリイカ 2011 年 7 月臨時増刊号 (2011)、がある。この作品が多くの読者に受け入れられてきた理由は多々あるが、本稿はこの作品に描かれた規範的な側面だけを検討する。ここにいう規範は、法制度だけでなく、倫理や道徳等、人間と社会の関係に関する秩序全体をさす極めて広範な概念である。飯田一史『ベストセラー・ライトノベルのしくみ』244-281 頁 (青土社、2012) は「オタク世代」の観点からこの作品がヒットした理由を分析している。
- (2) 秩序の破壊者が秩序の創造者でもあるという両義性の思想は多くの芸術作品で表現されてきた。モーツアルトのオペラ「フィガロの結婚」におけるケルビーノ、「魔笛」のパパゲーノ、夏目漱石の小説『坊ちゃん』における「おれ」=坊ちゃんと山嵐、『三四郎』における与次郎、山田洋次の映画「男はつらいよ」シリーズの寅さん等、名作には古い秩序を破壊して新しい秩序を創造する人物がしばしば登場する。この思想を方法として展開した典型例は大江健三郎の小説『ピンチランナー調書』(新潮社、1976) と『同時代ゲーム』(新潮社、1979) である。
- (3) 全能感（又は万能感ともいう）は涼宮ハルヒシリーズのライトノベルと同様にオタク文化を形成する作品で重要なテーマになっているようである。溝部宏二「新世紀エヴァンゲリオンにみる思春期課題と精神障害～14 歳のカルテ～」追手門学院大学地域支援心理研究センター紀要 8 号 42 頁以下 (2011)。
- (4) 最高裁判所大法廷判決昭和 51 年 5 月 21 日 刑集 30 卷 5 号 615 頁。
- (5) 注 4 の最高裁判決を考慮すると、学校教育法 5 条、地方教育行政の組織及び運営に関する法律 23 条 9 号はこのような学校管理権を各学校に裁量権として与えていると理解できる。参照、神田修「学校管理権の教育法的検討：学校の自治保障のあり方」山梨学院大学法学論集 45 号 65 頁以下 (2000)。
- (6) ジョン・ロックによると「自然状態においては、自然法の執行は各人の手に委ねられているのであり、これによって、各人は、この法に違反する者を、法の侵害を防止す

る程度にまで処罰する権利をもつ」（ジョン・ロック（加藤節訳）『完訳 統治二論』299頁（岩波書店、2010））。しかし、各人が自然法を理解せず、互いに異なる規範意識をもっていたら、自然状態はロックのいう戦争状態（同上、312頁以下）へ容易に移行する。ロックに先立ち、ホップズは自然状態に自然法の存在を認めず、それゆえ自然状態を戦争状態だと考えていた（ホップズ（水田洋訳）『リヴァイアサン』207頁以下（岩波書店、1992））。自然状態に関する両者の主張は異なるが、戦争状態を分析すると、両者の違いが目立たなくなる。作品中では、ハルヒだけが戦争状態に突入している。

(7) この閉鎖空間に元の世界の法律が適用されるかどうかは難問である。この問題は作品中だからこそありうる虚構の問題だが、理論的には興味深い論点である。私は基本的な法的思考を行えば民法709条の不法行為と同じ考え方方が適用できると考えている。例えば、J.S.ミルは1859年に出版した『自由論』（“On Liberty”）の中で有名な危害原理を展開している。ミルは、危害原理を法解釈として展開していないにもかかわらず、民法上の不法行為と基本的には同じ論理を展開している。法的思考であれ哲学的思考であれ、どのような分野からの思考であっても、冷静に問題に対処すれば類似の解決方法が生み出されると私は考えている。

(8) 作者の谷川流がフロイトのどの著作を連想しながらこの物語の終盤を書いたのか私には分からないが、フロイトの無意識、エロス、タナトスという概念を連想しながらこの物語を書いたように私には思える。フロイトにこんな言葉がある。「文化とは、人類を舞台にした、エロスと死のあいだの、生の欲動と死の欲動のあいだの戦いなのだ。この戦いこそが人生一般の本質的内容

であるから、文化の発展とは、一言で要約すれば、人類の生の戦いだ。」（フロイト「文化への不満」『フロイト著作集3 文化・芸術論』477頁（人文書院、1969）。）閉鎖空間における巨人の破壊活動はハルヒの死への欲動が破壊活動として顕在化したものであり、ハルヒがキヨンと唇を合わせて元の世界に戻るのはハルヒの生への欲動が顕在化した結果である。ことによると、ハルヒが作り出した閉鎖空間は作者にとって無意識という概念の表象かもしれない。同様に、ハルヒとキヨンは作者の無意識が生み出した作者のエロスとタナトスの表象である。

（受付日：2012年10月10日）